

私の研究



子どもを取り巻く 社会環境の変化と人間関係 —乳幼児期の愛着形成に着目して—

鈴木 智子 (すずき ともこ)

福島学院大学 短期大学部 保育学科
准教授



はじめに

わが国は1960年代以降、産業の進展とそれに伴う都市化の急速な進行により地域社会は大きく変容、人口が都市部に集中し、都市型生活様式の浸透によって核家族化が進行しましたが、その結果として、地域関係・近隣関係が衰退化しました。大人社会における地域関係・近隣関係の衰退化は、地域の子ども同士の仲間関係にも影響を及ぼしています。

また、近年における家庭の変化として、世帯の小規模化の傾向があり、それは、核家族化と出生率の低下による1夫婦あたりの子どもの数の減少によるところが大きいのです。「合計特殊出生率の低下」は、「ひのえうま」という特殊要因によりそれまでの過去最低であった1966年の1.58を下回り、「1.57ショック」とよばれた1898年以降、「少子化」のキーワードとして現代社会の危機を示すものとなりました。少子化の背景は、女性の高学歴化や社会進出、経済の不安定さによる若年者の就業困難を受けた晩婚化や非婚化などの理由

があげられています。

家族が縮小化することで子どもの育ちはどのように変化するのでしょうか。核家族の家庭における人間関係は、少ない兄弟姉妹と親との関係だけに限定されるため、大家族だった時代のように家庭内で多様な人間関係を経験することが困難になってきています。

このような現代社会の子育て環境では、もはや子どもの人間関係の発達を家庭だけで支えられるものではなく、子ども同士の関わりや仲間関係を育む集団保育の場としての就学前教育・保育施設の役割がますます重要になってくるのです。厚生労働省が示す「保育所保育指針」第1章総則の「保育の目標」には、「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である」と記されています。

このように、乳幼児期は人格形成の土台づくりの時期であり、その後の人生に大きな影響力を及ぼすことが明らかであるとされています。人生の

始まりである乳幼児期には、養育者との愛着関係がその人格形成の土台づくりの基礎となると言えるのです。

1. 乳幼児期の愛着と心の育ち

子どもは、生まれてすぐには自分自身で体を動かしたり、移動したりすることができず、大人の働きかけによってのみ、欲求や思いを叶えていくことが可能となります。自分の欲求や思いを叶えてくれる大人が子どもにとって大切な存在となり、子どもの心の中に、これから生きていく上で重要な「人と関わる力」が、感覚的ではありますが形成されていくのです。このように、日々丁寧な大人とのかかわりを通して3歳頃までに、人との関わりの基本となる「愛着」が形成されます。

愛着の対象は、一般的には母親であることが多いのですが、必ずしも母親とは限らず、また、1人ではなく、父親、祖父母、兄弟姉妹、親類、血のつながらない他者とも愛着が生まれます。つまり愛着とは、特定の人との間に形成される心理的絆のことです。この愛着が形成されることで、人と関わりたいと思うようになり、また人と関わるのが楽しく感じられ、いろいろな人との関係づくりが広がっていきます。

逆に愛着関係が形成されないと、人と関わることに對して不安を感じ、好ましく思えない状況になります。つまり、乳幼児期に両親や兄弟姉妹などの家族との間に愛着を形成することが、将来にわたる人との関わりを広げたり深めたりするのです。

2. 親子関係における愛着とその後の人間関係

ボウルビー (Bowlby, J) は44名の非行少年の生い立ちを調べ、すべての少年が早期に親に捨てられたり死別するという別離体験があることを明らかにしました。母子関係において、安心感や信頼感を形成することが、子どもの発達において重要であると提唱したのです。また、養育者は小さな子どもにとって安心の基地、あるいは安全な避

難所としてあるべきだと言っています。つまり、子どもは特に感情の崩れがなく落ち着いているときには、養育者を「安全の基地」としてそれを拠点に活動の範囲を広げ、いろいろなことにチャレンジし思いっきり遊び、探索や冒険を心から楽しむことができるのです。エインズワース (Mary, D. S. Ainsworth) らによって、愛着が形成される過程について研究され、おおよそ1歳頃の愛着形成において、個々の子どもの保護者に対して示す愛着行動が異なることがわかってきました。

この愛着行動については、「ストレンジ・シチュエーション法」により、実験現場において測定することができます。この実験では、部屋に知らない人と一緒にいる状況や、部屋に一人取り残されるといった、子どもがストレスを感じるような状況におかれたときに、保護者に対する行動を引き出し、その愛着行動の様子から保護者との関わりについて調べようとするものです。

子どもが示す愛着の特徴には「安定型」と「不安定型」があります。生後1年間のやり取りの中で裏切られず対応された乳児は養育者に安定型愛着を向ける一方、我慢を強いられ、大人本位の予測しにくい対応をされた乳児は、不安定型愛着を形成します。不安定型愛着には、回避型、アンビバレント型、無秩序・無方向型があります(表1)。

乳幼児期の愛着型は、その後の発達状況や経験の変化を経てもあまり変わらず、児童期、思春期、成人期に継続されると言われています。安定型愛着の乳幼児の集団適応、性格、友達関係や学業成績などは総じて良好であり、乳幼児期の安定型愛着は、その子の将来の展望を明るくすることが知られています。

このように、乳幼児期は母親(保育園、幼稚園では保育者)との愛着形成が大切な時期なのです。この点について脳科学の研究では、母親のスマートフォン依存による乳児への眼差し不足が、乳幼児期の母と子の愛着の形成や子の脳の発達にも大きく影を落としているとされ、乳児が不安や不快の状況を泣いて知らせても、母親がスマートフォ

表1

子どもが発達させる愛着の特徴	養育における親の特徴
安定型 (Secure) ：親が部屋から出ていくときには、それを止めようとする。親がいない間は泣く。見知らぬ他者の女性の慰めを少しは受け止める。親が戻ってくると喜び、親との相互作用をする。	子どもの欲求や状態の変化に敏感であり、子どもの行動を過剰に、あるいは無理に統制することが少ない。遊びや身体的接触も子どもに適した快適さでしている。
回避型 (Avoidant) ：親との分離に際して反抗したり泣いたりしない。親がいない間も泣くことはしない。見知らぬ女性ともある程度の相互作用が起こる。親が戻って来た時も喜んで迎えずドアをちらっと見る程度で遊び続ける。	全般的に子どもの働きかけに対して拒否的に振る舞うことが多いが、特に愛着欲求を出した時にその傾向がある。子どもの行動を強く統制しようとする関わりが、相対的に多く見られる。
アンビバレント型 (Ambivalent) ：親が部屋から出ていくときは泣いて止めようとする。親がいない間も泣きが激しいので分離時間は短縮され親はすぐに戻ってくる。親を迎え入れ親が抱き上げると怒って背中を反らす。おろすと抱けとどちらともつかない行動を示す。情動的な動揺はほとんど取まらない。	子どもの信号に対する応答性が、感受性が相対的に低く、子どもの状態を適切に調整することが不得意。子どもとの間で肯定的なやりとりができる時もあるが、それは子どもの欲求に応じたというよりも、親の気分や都合に合わせたものであることが多い。応答がずれたり一貫性を欠いたりすることが多い。
無秩序・無方向型 (Disorganized) ：上記3タイプに分類不能だとされる、養育者への接近に矛盾した不可解な行動を見せるタイプ。親が戻って来た場面に後ろずさる、親に対するおびえ、接近、回避のどっちつかずの行動。	養育者が子どもにとって理解不能な行動を突然とることがある。たとえば、結果として子どもを直接虐待するような行為など。子どもにとってはわけのわからない親の行動の様子は子どもに恐怖感をもたらす。子どもはなすすべがなくどのような行動を取ってよいのか混乱する。

出典：咲間まり子編 保育内容「人間関係」みらい2018 P41を一部改変

ンに夢中で適切な対応をしてもらえないと、脳幹の発達は順調に進まず、感情の機能が調整できなくなるとも言われています。

こうした子育てに関する問題で深刻なのは、子どもの数の少なさではなく、乳幼児が上手く育っていない現実にあります。DV、虐待、性被害、ひきこもり、いじめなどの問題が増加している中、加害者や犯罪者の生い立ちには、良い親や大人になれるように育てられなかった、失われた子ども時代があるのです。

失われた子ども時代に、例えば失われた愛着の修復は可能でしょうか。これは勿論、無理なことです。失われた愛着の形成のために、これから愛情を注ぐ愛着提供者さえ存在すれば失われた愛着が十分に修復されるとは考えられません。被虐待児の心身の発達においては、それまでに受けた虐待より、病理的な愛着が形成され、定着していることが問題なのです。重度の虐待であればあるほど、愛着再形成の過程は、ゼロからではなく、マイナスからの出発になり、より困難だと言えます。

3. これからの保育施設等に期待される役割

平成29年に改定された保育所保育指針では、0～2歳児の保育、いわゆる乳児保育の記述が充実されました。改定後の保育所保育指針には文言としては記載されていないものの、乳児期にこそ育てなければならないことへのこだわりを大事にしています。

愛着（アタッチメント）では、特に対人関係の安定した配慮の中で、「自分はいつだって助けてもらえる」という安心感を手に入れることが、この時期の発達上の課題になっているのです。保育所保育指針では愛着あるいは愛着関係という言葉は使っていませんが、保育所保育指針改定のための委員会で作成された「保育所保育指針の改定のための議論の取りまとめ」の中では、次のように、この時期の大事さや特有の課題が指摘されています。

「乳児期から2歳児までの時期には、保護者や保育士など特定の大人との間で愛着関係が形成され、食事や睡眠などの生活リズムも形成されていく。また、この時期は、周囲の人や物、自然など

表2 年齢区分別の保育所等利用児童数も割合（保育所等利用率）

	平成30年4月	平成29年4月
3歳未満児（0～2歳）	1,071,261人（36.6%）	1,031,486人（35.1%）
うち0歳児	149,948人（15.6%）	146,972人（14.7%）
うち1・2歳児	921,313人（47.0%）	884,514人（45.7%）
3歳以上児	1,543,144人（51.4%）	1,515,183人（49.3%）
全年齢児数合計	2,614,405人（44.1%）	2,546,669人（42.4%）

出典：厚生労働省（保育所等利用率：当該年齢の保育所等利用児童数÷当該年齢の就学前児童数）

の環境との関わりの中で、自己という感覚や、自我を育てていく時期でもある」

「乳児期からの保育の積み重ねは、その後の成長や生活習慣の形成、社会性の獲得にも大きな影響を与えるものであり、子どもの主体性を育みながら保育を行うことが重要である。また、保育士等との信頼関係の構築により基本的信頼感を形成することは、生涯を通じた自己肯定感や他者への信頼感、感情を調整する力、粘り強くやり抜く力などの、いわゆる非認知的能力を育むことにもつながるものであり、保育士等が子どものサインを適切に受け取り、子どもたちの自己選択を促しつつ、温かく応答的にかかわっていくことが重要である」いわゆる非認知能力の基本がこの時期に育つことを指摘しています。

厚生労働省によると、平成30年の3歳未満児の保育所利用率は36.6%と、前年度から1.5%の増加を示しています。女性の社会進出とともに保育所入所率が高まり、子どもを育てる家庭との最初の接点となりうる保育施設が、保護者に必要なサポートを提供したり、保育施設を中心としたコミュニティをつくって地域や親子をつないだりすることが、安定した親子関係の基礎をつくることにつながります。（表2）

現代の子育てを支えていく一つの方法として、保育の場で理想的な地域社会のように互いに支えあう子育てコミュニティをつくり、分断された世代をつないで、個別化した子育てを共同化していくことが必要なのです。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省告示第117号 保育所保育指針（平成29年度告示）フレーベル
- 2) 遠藤 利彦 アタッチメントが拓く生涯発達 ミネルヴァ書房 2018
- 3) 篠原 郁子 アタッチメント 非認知的な発達 ミネルヴァ書房 2018
- 4) 渡辺 久子 乳幼児と親 日本評論社 2018
- 5) 咲間 まりこ編 保育内容「人間関係」みらい 2018
- 6) 濱名 浩編 新時代の保育双書 保育内容人間関係 みらい 2018
- 7) 汐見 稔幸 日本の保育・幼児教育はどこへ向かうのか ミネルヴァ書房 2018
- 8) 社会保障審議会児童部会保育専門委員会 保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ 2016

<プロフィール>

福島学院大学大学院心理学研究科こども心理専攻修了 修士（こども心理）

現在、福島学院大学短期大学部保育学科 准教授

こども・保育学科実習指導室長

教科目：保育内容総論、保育内容指導法「人間関係」、幼児と人間関係、保育実習Ⅰ・保育実習Ⅱ